

第九講 歴史主義の外側

レポート講評

近代歴史学とは何か：

諸君のレポートをキーワード中心にまとめてみましょう。先ず時代を中心に近代歴史学を説明しているレポートがありました。「19世紀」とか「産業革命」後とか「近代市民社会」がフランス革命などで確立されたとか。それは18世紀以前の歴史学とは異なるという意味合いで時代の持つ意味を強調するものでした。

近代歴史学の背景にある19世紀ヨーロッパの文化的環境の側面からアプローチするレポートもありました。「国民主義」や「合理主義」、さらには文献学的研究法の発展の上に成り立つ「史料批判」、「神話」や「伝承」の排除、そして「実証主義」的研究法などについて言及するものが比較的多く見受けられました。ランケの有名な「本来如何にあったか」という言葉を引用しているものもしばしば見受けられました。

さらに近代歴史学が「大学」を中心に発展していったこと、その研究と教育の中心が「文学部」の史学科であったことなどが指摘され、その歴史学が「公文書」研究を基礎とする「外交史」であることが指摘されておりました。そしてこの「文学部」の歴史学が史料の「解釈」によって行われていることが特徴として挙げられていました。

中にはドイツの歴史学の社会学的な特徴に触れているレポートもありました。「大学」の歴史学者が社会的には「教養ある中産市民層」の出身者であることが多く、彼らの価値観が異質な社会層の参入を拒み、一種の「ギルド」を形成していたと書いているのです。そのことが「文化史」を排除し、「法則性」を敵視し、「発展史観」に背を向けることになったと論じているのです。

このように諸君のレポートは単純な時代による特徴づけから「実証主義」という言葉に集約される歴史研究法、さらには近代歴史学の領域的な偏向へと内容的に深化していき、その社会的・文化的背景へと目を向けていくという関心の広がりを感じることができました。その上で何故近代歴史学がその後批判されていくのかを探っていこうとする諸君の深まりを見て取ることができました。

近代歴史学の問題は大事ですので、今後もよくよく考えてください。21世紀の歴史学、さらには文化史学を自分で考えてみましょう。

ホイッグ史観

イギリス

進歩史観・イギリスにおける自由主義化の進展と産業の発展

ホイッグ・プロテスタント対トーリー・カトリック

マコーリーやトレヴェリアン対バターフィールド

マルクス歴史学

「ヴェラ・ザスリッチへの手紙」『経済学批判』：歴史発展の経済学的構造とモデル
上部構造と下部構造、生産関係と生産諸力の構造的矛盾。

『資本制生産に先行する諸形態』：アジア的生産様式論争（アジアの停滞）

『資本論』：資本主義の構造的矛盾

『帝国主義論』：高度資本主義の行動と旧植民地の従属化

ソ連の歴史的正当性

冷戦における世界認識

旧植民地における経済開発戦略

先進工業諸国における民主化のイデオロギー

資本主義に対する社会主義の優越性

富の偏在と貧困への批判→富の分配論

アジアの後進性を強調

経済や社会への関心

国際的な支配と従属の分析モデルを提供

近代化論

W. W. ロストウ（木村・久保・村上訳）『経済成長の諸段階——1つの非共産主義宣言』ダイヤモンド社、1961年。

5つの発展段階

第1段階：伝統的社会

モノカルチャ。低い労働生産性。食糧生産が主体

第2段階：離陸先行期

経済の成長局面への移行

第3段階：離陸（テイクオフ）

貯蓄率と投資率の上昇

リーダーとなる産業の出現

経済成長を持続化するための制度的枠組みの成立

第4段階：成熟化

近代的産業の拡大

重化学工業の産業のリーダーとなる

産業構造の第2次産業化

第5段階：高度大量消費

国民一般の所得水準の上昇と消費需要の構造変化

耐久消費財やサービスに対する需要の爆発的増大

アメリカの冷戦外交を支援

ソ連のマルクス歴史学に対する対抗

開発途上国の近代化、欧米型民主国家形成のための戦略を提供

ソ連型の社会主義に代わる成長戦略の提供

社会主義も資本主義も「近代化」の過程に過ぎないと、社会主義の矮小化

開発途上国における成長戦略の失敗と欧米先進諸国への従属化

ベトナム戦争の敗北と反米ナショナリズム

韓国、台湾、シンガポール、香港の新興工業経済地域（NIES）における非民主的独

裁政権下での開発独裁型経済発展の成功

国際従属理論や文化帝国主義論の台頭

1970年代以降、影響力低下